The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『源氏物語』の引歌一首「神無月いつも時雨は……」
Author(s)	堤, 和博
Citation	詞林. 1994, 16, p. 45-57
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67358
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『源氏物語』の引歌一首

――「神無月いつも時雨は……」――

堤　和博

はじめに

私は先の拙稿（1）において、『本院侍従集』の33番詞書にある引歌表現「いつもしぐれは」の引歌は、『源氏釈』等に載る出典未詳歌「神無月いつも時雨はふりしかどかく袖くたすをりはなかりき」（2）であると指摘した。しかし、その後、田坂憲二氏の論文に「「神無月いつも時雨は」考―源氏物語引歌瞥見―」（3）があるのを知った。拙論を執筆するにあたり当然参照しなくてはならなかった論文であるにも関わらず、見落としてしまったことを、田坂氏には深くお詫び申し上げたい。

そこで本稿では、田坂氏の論を踏まえ〔神無月歌〕に関する私見を述べるとともに、葵巻の表現等についての試論を展開してみる。

一　田坂氏説

さて、〔神無月歌〕が『源氏物語』の古注釈で引歌として最初に指摘されるのは、葵巻で葵上の喪に服す源氏が朝顔の宮に文を送る場面である（4）。

なほいみじうつれづれなれば、朝顔の宮に、今日のあはれはさりとも見知りたまふらむとおしはからるる御心ばへなれば、暗きほどなれど聞こえたまふ。絶え間遠けれど、さのものとなりにたる御文なれば、咎なくて御覧ぜさす。空の色したる唐の紙に、

わきてこの暮こそ袖は露けけれもの思ふ秋はあまたへぬれど

いつも時雨は。

とあり。　〈二一一〇三〉

この傍線部分の引歌を、『源氏釈』以下の多くの古注釈は〔神無月歌〕とする。田坂氏も「季節といい、語句の整合性といい、全体に漂う哀感といい、この場面に完璧に符合するものである」ことを認める。しかし田坂氏は〔神無月歌〕が出典未

詳歌であり、『源氏釈』の「出典未詳歌の中には、源氏物語の本文と余りに密接過ぎて、やや小首を傾げたくなるようなものも時折だが含まれている」と指摘した上で、次に引用する総角巻では注釈書によって引歌が違っているのを重要視する。

例の、こまやかに書きたまひて、

ながむるは同じ雲居をいかなればおぼつかなさを添ふる時雨ぞ

「かく袖ひつる」などいふこともやありけむ、耳馴れにたるを、なほあらじことと見るにつけても、うらめしさまさりたまふ。　〈七―九五〉

時は神無月。中君のもとを思うように訪れられない匂宮から中君に文が送られる。傷心の中君にかわり大君が文を披見している。ちなみに、大君は病の床にある。

ここの傍線部分の引歌として、『花鳥余情』以下は〔神無月歌〕を挙げるが、『源氏釈』、『奥入』、『紫明抄』、『河海抄』等は「いにしへもいまもむかしもゆくすへもかく袖くたすたぐひあらじな」（5）歌を挙げる。

田坂氏は、葵巻で〔神無月歌〕を指摘した『源氏釈』等がここで別歌を挙げているのは、〔神無月歌〕の下句が「かく袖ひつる（くたす）……」ではなかったからだと推論し、さらに葵巻の引歌は、紫式部の伯父為頼の「神な月いつもしぐれはかなしきをここゐのもりもいかがみるらん」（6）であるとする。そしてその間の事情について、次のように推測する。

推測をややたくましくすれば、世尊寺伊行は為頼の「神無月……子恋ひの森もいかが見るらん」の和歌を、葵巻の引歌として指摘しようとしたが、記憶がやや曖昧であったために、源氏物語の本文に引きずられて、下の句が「かく袖ひつる（くたす）をりはなかりき」となってしまったのではないだろうか。しかし、本来はそのような和歌は存しないのであるから、総角巻の「かく袖ひつる」の時は、この和歌は挙げずに、別の「いにしへも」の和歌を指摘したのではないかと思われる。

〔神無月歌〕の存在を否定してかかれば、田坂氏の推測も成り立つだろう。しかし、私は次節に述べることから〔神無月歌〕の存在は十分に認められると思うのである。

二　〔神無月歌〕の存在

田坂氏は葵巻と総角巻だけを問題にするが、先の拙稿でも指摘した通り、〔神無月歌〕が引歌であるとみて間違いないであろう箇所が他に二つ有る。その一つは『源氏物語』の幻巻で、紫上の一周忌をやや過ぎた頃の源氏の様子を描く場面である。

神無月は、おほかたも時雨がちなるころ、いとどながめたまひて、夕暮の空のけしきにも、えもいはぬ心細さに、「降りしかど」とひとりごちおはす。　〈六―一四九〉

傍線部分の引歌として『源氏釈』以下の古注釈の多くは〔神無

月歌〕を挙げている。〔神無月歌〕が引歌として相応しいのは一目瞭然であろう。ちなみに、〔為頼歌〕には「降りしかど」という句（または、類似の句）はないからここでは引歌にはならない。また、他に適当な引歌もみつからない。

もう一つは、『本院侍従集』の33・34番の贈答のうちの33番詞書にある一節で、従来典拠未詳とされてきた所である。母親の喪に服す男に女が文を送ることをきっかけにして贈答が交わされる（7）。

かくてこのきみ、女おやの御ふくになりたまひぬと聞て、とぶらひたてまつり給たりける御かへりごとに、

「いつもしぐれは」とのたまへりけるに、女、

われさへぞ袖は露けき藤衣君おりたちてぬると聞しに

返し

をとにのみきゝわたりつる藤衣ふかくわびしと今ぞしりぬる

母親を亡くした男は「いつもしぐれは」と言うことで、表には出さなかった「かく袖くたすをりはなかりき」と女に訴えたかったのだ。男の返歌（34番）から窺えるように、男にとっては初めての服喪で、想像を越える悲しみに沈んでいる男の気分は「かく袖くたすをりはなかりき」と合致する。女はそれに答えて、上句を「われさへぞ袖は露けき」と仕立てている。ここを説明的に訳せば、「あなたは、かく袖くたすをりはなかりき、と言いたいのでしょうが、私までも袖は露っぽくなってしまっています」となろう。続く下句は「袖」の連想から喪服を表す「藤衣」とその縁語「おり」で（松平文庫本・群書類従本等では、「ぬる」が「藤衣」の縁語である「きる（着る）」になっている）で纏められているのである。それを受けた男の方では、女が詠み込んできた「藤衣」を中心にして返歌を作っている。

なお、この場合引用されている「いつもしぐれは」は〔為頼歌〕にもある句だが、〔為頼歌〕が引歌である可能性はなかろう。〔為頼歌〕は田坂氏の考証に拠れば、永祚元年（九八九）の詠であるが、『本院侍従集』は天慶天暦期の遺り取りが纏められたもの（8）と思われるからである。

なお、〔神無月歌〕以外に適当な引歌はやはりみつからない。

要するに、〔神無月歌〕は葵巻のみならず、幻巻でも『本院侍従集』でも引歌として相応しい歌なのだ。

先にも触れたように、田坂氏は、葵巻で〔神無月歌〕が引歌であるなら、出典未詳歌なのにあまりに場面に適合しており、さらに『源氏釈』の引く出典未詳歌の中には、あまりに場面に適合していてかえって存在が疑われるものもあることを問題視し、〔神無月歌〕は〔為頼歌〕の下句を伊行が誤ったものではないかと推測する。だから、総角巻では『源氏釈』等は引歌として〔神無月歌〕を挙げなかったのだという。

引歌として適合するのが、葵巻だけならこのような推測も成り立つだろう。しかし、今指摘したことよりすると、〔神無月歌〕が伊行の記憶違いによって生じたと想定するのは無理であ

る。そのような歌が、葵巻のみならず幻巻でも、はたまた『本院侍従集』でも引歌として適合するとは考えられない。特に『本院侍従集』の場合は、今も述べたように、引歌表現「いつもしぐれは」の引歌が〔神無月歌〕ならば、女の歌の上句とものみごとに適合する。〔神無月歌〕の存在を認めるのが自然であろう。

なお、田坂氏が問題とする「類似の条件下にある総角巻」で『源氏釈』等が〔神無月歌〕を挙げないことについては次節で触れる。また、葵巻等で〔神無月歌〕が引かれた表現効果については、第四節以降で順次触れてゆく。

三　〔神無月歌〕の詠歌事情

前節での考察により、〔神無月歌〕の存在を疑う必然性はないとわかった。そこで次に、〔神無月歌〕の詠歌事情について考えておきたい。

〔神無月歌〕の詠歌事情は、詞書が伝わらないので正確にはわからない。時雨の降る神無月であることと、かつて経験したことのないほどの悲嘆に浸っていることが歌句から窺えるだけで、悲しみの原因は不明である。ところで、前節で指摘した葵巻・幻巻・『本院侍従集』の場面がいずれも故人を哀悼する場面であるのは偶然ではないだろう。さすれば、〔神無月歌〕はもとは故人を哀悼する歌であった可能性大である。あるいは、元来の詠歌事情には関わらず、いつの間にか故人を哀悼する場面で引かれる歌として定着していったのかも知れない。

だとすると、田坂氏が「類似の条件下にある総角巻」で『源氏釈』等が〔神無月歌〕を指摘しないのを疑問視するのはあたらない。つまり、第一節（四六頁上段）で引用した総角巻は神無月の時雨の降る時に悲嘆に浸っている点は他の例と類似しているが、けっして死者を悼んで悲しんでいる場面ではない。その点、葵巻・幻巻・『本院侍従集』の例とは決定的に相違する。伊行や定家は〔神無月歌〕が死者を悼む歌であるのをまだ知っていて、総角巻では別歌を挙げたのであろう（9）。

さて、今述べた〔神無月歌〕の詠歌事情に関する推測をもとに、〔神無月歌〕が葵巻・幻巻・『本院侍従集』でどのように生かされているのか次に検討していく。

四　葵巻での引用

まずは第一節（四五頁下段）で引用した場面に至るまでの経緯を確認しておく。源氏が葵上の「御法事など過ぎぬれど、正日まではなほこもりおは」〈二―九九〉しているある日、いつものように三位の中将（葵上の兄）が源氏の所にやって来た。やや長くなるが引用しておく。

時雨うちして、ものあはれなる暮つかた、中将の君、鈍色の直衣、指貫、うすらかに衣がへして、いとををしうあ

ざやかに、心はづかしきさまして参りたまへり。君は、西のつまの高欄におしかかりて、霜枯れの前栽見たまふほどなりけり。風荒らかに吹き、時雨さとしたるほど、涙もあらそふここちして、「雨となり雲とやなりにけむ、今は知らず」とうちひとりごちて、頬杖つきたまへる御さま、女にては、見捨ててなくならむ魂かならずとまりなむかしと、色めかしきここちに、うちまもられつつ、近うついゐたまへれば、しどけなくうち乱れたまへるさまながら、紐ばかりをさしなほしたまふ。これは、今すこしこまやかなる夏の御直衣に、紅のつややかなるひきかさねてやつれたまへるしも、見ても飽かぬここちぞする。中将も、いとあはれなるまみにながめたまへり。

「雨となりしぐるる空の浮雲をいづれのかたとわきてながめむ

行方なしや」と、ひとり言のやうなるを、

見し人の雨となりにし雲居さへいとど時雨にかきくらすころ

とのたまふ御けしきも、浅からぬほどしるく見ゆれば、あやしう、年ごろはいとしもあらぬ御心ざしを、院など居立ちてのたまはせ、大臣の御もてなしも心苦しう、大宮の御かたざまに、もて離るまじきなど、かたがたにさしあひたれば、えしもふり捨てたまはで、もの憂げなる御けしきながらありへたまふなめりかしと、いとほしう見ゆるをりをりありつるを、まことにやむごとなく重きかたは、ことに思ひきこえたまひけるなめりと見知るに、いよいよくちをしうおぼゆ。よろづにつけて光失せぬるここちして、屈じいたかりけり。

〈二―一〇〇～一〇二〉

この後、新潮日本古典集成の小見出しが「源氏、大宮に若君を思う歌を贈る」となっている場面があり、第一節（四五頁下段）で引用した場面へと続く。

さて、問題の中心は源氏が「うちひとりごち」た「雨となり雲とやなりにけむ、今は知らず」である。この句は、諸注に指摘があるように、中唐の詩人劉禹錫が愛人を亡くして作った「有所嗟」（10）の一節「為雨為雲今不知」を朗詠したものである。訳は「我が恋しい人の魂は雨となったのか、雲となったのか、今は知らない」となろう。ところで、「有所嗟」は『文選』巻十九に載る楚の詩人宋玉の「高唐賦序」（11）の伝説を踏まえているのだが、それは死者に関する伝説ではない。昔、懐王の寵愛を受けた神女が別れ際に「妾在巫山之陽、高丘之阻。旦為朝雲、暮為行雨、朝朝暮暮陽臺之下。」と言ったが、はたして「旦朝視之如言」であった。それを踏まえれば「有所嗟」の先の一節は「高唐賦序の神女は、旦には朝雲となり暮れには行雨となると言ったが、わが恋しい女の魂は雲となったのか雨となったのか、今は知らない。」と意訳できるだろう。源氏も劉禹錫とまさしく同じ思いで朗詠したのは容易に想像できる（12）。その姿を見た中将が「女にては、見捨ててなくならむ

魂かならずとまりなむかし」と思うのは、新潮日本古典集成の頭注によると「劉禹錫の詩（引用者注―「有所嗟」のこと）の「女郎の魂は暮雲を逐うて帰る」を踏まえたもの」である。中将は「色めかしきここちに」こう思うのだが、それは勿論玉上琢彌氏の言う通り、「亡き妹への追慕からである」（13）のだろう。いずれにせよ中将は、源氏の朗詠を聞き、自分の喪ったのは恋人ではなく妹だが、その妹の魂がこの世のどこかに留っているのを期待し始めたものと思われる。そうすると中将の詠歌は、やはり新潮日本古典集成の頭注の指摘通り、「源氏が劉禹錫の詩の「雨となり雲とやなりにけむ、……」と誦したことから、その気持を歌にしたもの」である。加えて、中将の詠歌に添えられた一言「行方なしや」に込められた中将の気持ちは、これも新潮日本古典集成の頭注のように「（宋玉の「高唐賦序」には、神女は朝には雲となり、夕には雨となって、朝々暮々陽台の下におりますと言ったが）葵の上は行方も知れずになってしまったことだ」（括弧内原文）と説明できる。「有所嗟」と同様、魂の行方を知りたいのだけれども、どこにその魂があるのかわからないという気分を表したものであるのは明らかである。それに源氏が唱和しているわけである。

従って、繰り返しになるが、この場面では中将は「高唐賦序の神女は、旦には朝雲となり暮れには行雨となると言ったが、妹の魂は雲となったのか雨となったのか今は知らない。」と悲しんでいるのであり、もっと言うならば、なんとか葵上の魂の在処を知りたいものだと思っているに違いないのである。

そうすると、この場面が「ものあはれなる暮つかた」であるのと、源氏の歌に「見し人の雨となりにし」とあるのが注目される。今までは「有所嗟」を引いて、魂の在処をたずねあぐんでいた源氏は、今度は「旦為朝雲暮為行雨」と明示されている「高唐賦序」を直接引き、暮れに降る雨に葵上の魂を見ている、あるいは見ようとしていると思うのである。

つまりこの場面、「高唐賦序」を引く「有所嗟」を引いて、葵上の魂を雲か雨かと探していたのが、源氏の詠歌に至ると、「高唐賦序」を直接引き、「暮つかた」にそぼ降る雨を葵上の魂と見ているのである。従って、「高唐賦序」にある「暮」と「雨」は欠かすことのできない大切な要素なのである。

次に大宮へ歌を贈る場面を挟んで朝顔の宮に手紙を贈る場面に移り、問題の引歌表現「いつも時雨は」がなされるのだが、ここでも源氏は「高唐賦序」を引いているのではなかろうか。中将との会話からどれほどの時間が経過しているか明らかではないが、一端夕暮れにうち降る時雨に葵上の魂を見た源氏にとっては、もはや暮れに降る時雨はただの雨ではあり得ず、葵上の魂そのものに思えてならないのである。そう思ってこの場面を見てみると、源氏はまず歌の上句で「わきてこの暮こそ」と言い、「この暮」を取り立てて強調しているのが注意を引く。そして引歌表現「いつも時雨は」によって、「時雨」を提示する。間にある下句で袖が濡れることを言いつつ、暮れと時雨を

強調しているのは、「高唐賦序」を引いているからに違いなく、やはり源氏は夕暮れの時雨に葵上の魂をみているのである。従ってここでの引用歌句は「いつも時雨は」でなくてはならない。次に触れる幻巻のように「降りしかど」などではいけない。なぜなら、この前後に時雨の提示はなく、源氏が「いつも時雨は」を引くことにより、初めて時雨が提示されるからである。

源氏が〔神無月歌〕を引歌としたのは、単に〔神無月歌〕の詠歌事情や歌句と自分の現在の境遇が似ているからだけではなく、中将と会話した時のように「有所嗟」に引かれている「高唐賦序」を引くことによって、夕暮れの時雨に亡き葵上の魂を見て、神無月にはいつも時雨は降るのだけれども、今年の時雨は特別のものであるために自分の袖はかつて経験したことのないほどに朽ちてしまった、という意味を込めようとしているからなのである。

葵上を追慕する源氏の情は、真実真心から強いものであるのが改めて確認できるのである。

ところで、問題を田坂氏が葵巻の引歌だと指摘する〔為頼歌〕に移すと、この場合〔為頼歌〕は引歌になっていないと言い切れるであろうか。「降りしかど」・「かく袖ひつる」と〔為頼歌〕には無い句を引いている幻巻・総角巻の場合は問題にならない。また、『本院侍従集』でもこの歌が引かれている可能性がないことは既に述べた。しかし、葵巻では〔為頼歌〕が引かれている可能性がないとは断言できないと私も思う。特に田坂氏が強調されるように、紫式部は伯父為頼に可愛がられており、家集や『源氏物語』に為頼の歌をよく使っている以上は、葵巻で〔為頼歌〕を紫式部が思い浮かべても不思議はない。その点、「引歌」をどう定義するかという微妙かつ重大な問題が絡んでくるが、〔為頼歌〕はあくまでも子どもを喪った人に贈った歌であり、葵上を喪った源氏が引くにはやや相応しくないのを思うと、やはり紫式部は引歌の第一番として〔神無月歌〕を意識していたに違いなく、〔為頼歌〕は本歌取でいうところの所謂参考歌程度にとどまるとみるべきであろう。

つまり、引歌を「読者が和歌を思い浮かべなくては本文が読みとれない場合」に引かれた歌と、「作者が和歌を思い浮かべながら文を書いた場合」に引かれた歌に分ければ(14)、〔神無月歌〕は前者に該当し、〔為頼歌〕は該当するとしても後者であると思うのである(15)。

五　幻巻での引用

第二節(四六頁下段)で引用した部分を再び確認していただきたい。源氏の引歌表現の直前が「神無月は、おほかたも時雨がちなるころ、いとどながめたまひて、夕暮の空のけしきにも、えもいはぬ心細さに」となっていて、ほとんど〔神無月歌〕の内容を含んでいるが注意を引くであろう。源氏が〔神無月歌〕を引くのは必然的でさえある。しかし、〔神無月歌〕には詠わ

れていない「夕暮」があるのを見逃してはならない。葵巻で「高唐賦序」と「有所嗟」が引かれる時、「雨」とともに「暮」が重要な要素であったことは既に述べた。そうするとここでも源氏は夕暮れの時雨に死者の魂、この場合は紫上の魂を見ているのではなかろうか。それで「降りしかど」を引き、下句の「かく袖くたすをりはなかりき」に葵巻と同じ様な意味を込めているものと思われるのである。

ちなみに、ここでは葵巻でのように「いつも時雨は」の部分を引く必要はない。いや、「いつも時雨は」を引いてしまえば、「時雨がちなるころ」と重複してしまい、かえって興ざめである。葵巻といい、幻巻といい、源氏が引歌表現を行う時、引用する歌句は適切に選ばれている。

いずれにせよ、それとは明示されていないが、幻巻でも「高唐賦序」と「有所嗟」を引いているのだと強調しておきたい。

ところで、今問題にした箇所の直後には次に引用したような叙述がくる。

雲居をわたる雁の翼も、うらやましくまもられたまふ。

大空をかよふ幻夢にだに見えこぬ魂の行方たづねよ

何ごとにつけても、まぎれずのみ、月日に添へておぼさる。

〈六―一四九・一五〇〉

周知の通り、巻名の由来となるこの歌は、玄宗が方士に亡き楊貴妃の魂を求めさせた「長恨歌」の故事を踏まえている。その直前に〔神無月歌〕が引かれているのは無意味ではないだろう。「高唐賦序」と「有所嗟」で死者の魂を見た源氏が、今度は死者の魂を訪ねていく故事を自然と連想しているのである。

六　〔神無月歌〕の詠歌事情再考

ここまでくると、〔神無月歌〕の詠歌事情に臆測を巡らしたくなってくる。結論から言うと、〔神無月歌〕はそもそも「有所嗟」と「有所嗟」が引く「高唐賦序」とを引きながら「暮」の「行雨」を死者の魂の変じたものととりなした歌物語的なものではなかったのか。

主人公が神無月の夕暮れに死者を偲んでいると、時雨が降った。そこで「有所嗟」や「高唐賦序」の「行雨」を思い出し、あの雨は死者の魂が変じたものかと思う。そして詠歌する。ならば、その歌の訳は、

神無月にはいつも時雨は降った。しかし、今降る時雨はただの雨ではない。「高唐賦序」の神女が暮れには「行雨」となるといったように、恋しいあの人の魂が変じて雨となったものに違いない。劉禹錫は「恋人の魂が雲と変じたか雨と変じたか」と嘆いたが、私は眼前の雨となったと思いたい。そう思うと、私の袖は時雨で濡れるばかりではなく、悲しみの涙で一層に濡れ、これほどに朽ちてしまうことはかつてなかった程なのである。

とでもなろうか。

このように推測するのは、葵巻で源氏が朝顔宮に贈歌する際に、「有所嗟」の一節も「高唐賦序」の一節も付け加えていなかったからである。また、幻巻でも「有所嗟」や「高唐賦序」が引用されていることを明確に示す語句はなかった。朝顔宮や当時の読者が源氏の詠歌と引歌表現から源氏の真意を汲み取ることを紫式部が期待できたのは、〔神無月歌〕自体が「有所嗟」と「高唐賦序」を引いたものであったからであろう（16）。

以上の臆説がもしあたっていれば、〔神無月歌〕は恋人を失った人の歌になる。

七　『本院侍従集』での引用

先に述べた内容と重なるが、もう一度問題の場面（四七頁上段）を確認しておくと、女親の喪に服す男（兼通がモデル）に女（本院侍従がモデル）が弔意を表す文を送ると、男は「いつもしぐれは」と返事する。折りに適った引歌であるのは確かなのだが、もし、前節で指摘しようにに〔神無月歌〕が恋人を失った時に詠まれたものならば、事情にはややずれがある。もっとも、引歌表現をする場合、必ずしも引歌と完全に同じ状況でなければならないとも限らないが。それと、『源氏物語』の場合のように「高唐賦序」と「有所嗟」とを意識して男が引歌表現をしたとしたら、恋人の魂が雨になるのを、母親の魂が雨になるという状況に置き換えたことになる。

結果的には、男が初めて服喪する心境と〔神無月歌〕の下句「かく袖くたすをりはなかりき」が似通い、女が上句でそれを踏まえるに止まっている。女の歌の下句は「藤衣」の縁語「おり（織り）」（「ぬる」は松平文庫本・群書類従本等では「きる（着る）」になっている）で綾なされ、男の返歌も「藤衣」がテーマとなり、〔神無月歌〕からは離れてしまっている。

つまり、恋人を亡くした時に詠まれたらしい〔神無月歌〕と女親を喪った男の立場は違うから、引歌表現は女と男の贈答のきっかけにはなっているが、女の返歌の巧みさは目立つものの、『源氏物語』におけるような深い表現効果は齎してはいないのである（17）。

八　〔為頼歌〕

田坂氏は幻巻・『本院侍従集』の引歌表現にはほとんど言及しないが（18）、葵巻の引歌表現は実は〔為頼歌〕を引いているのではないかと想定する。それについての私の考えはすでに示したが、この〔為頼歌〕もあるいは〔神無月歌〕を本歌としたものではないだろうか。

為頼が物語好きであったのは『為頼集』から窺えるが、一方、『為頼集』はかなりの数の哀傷歌を載せるのも事実である。そんな為頼の一面を『為頼集全釈』の「解説」（19）の言葉を借りれば、「肉親・縁者への情愛に溢れた」心情を赤裸々に吐露

する人と表現できる。同書が、「家族や眷属に限りない愛情を注いだ為頼であっただけに、それらの人々に先立たれたときの悲しみは大変なものであったようで、痛切な響きを持った和歌として結実している。」と指摘するのもむべなるかなである。

さて、問題の〔為頼歌〕を詞書から改めて引用しておく。

故あはたの右大臣どののはかなくなりたまひての年の十月に

神な月いつもしぐれはかなしきをここゐのもりもいかがみるらん

この本文によれば、「あはたの右大臣」が死んだ際に、故人の親に為頼が贈った歌になる。しかし、田坂氏の詳細な考察によると、実はこの歌は永祚元年（九八九）に粟田右大臣藤原道兼が長男福足君を亡くした時に為頼が道兼に贈った歌で、詞書は本来「故あはたの右大臣どのゝこはかなく……」とでもあるべきものだと言う。いずれにせよ、為頼の相手に対する同情の念はひしひしと伝わり、為頼自身も我が子を亡くしたような悲しみに包まれていることが痛いほど感じられる歌である。為頼は普段の磊落さはどこへやら、心底相手に同情の念を伝えようとしたのは想像に難くない。

その〔為頼歌〕と〔神無月歌〕の一二句が一致するのは単なる偶然であろうか。あるいはどちらかがどちらかの影響を受けたものであろうか。ところで、〔神無月歌〕は先にも述べたように、『本院侍従集』33・34番が贈答される際にも引歌として用いられているのだが、それは私の考証（20）では天慶六年（九四三）の神無月に行われた兼通と本院侍従の贈答がもととなっている。ということは、〔神無月歌〕は少なくとも天慶六年の時点で人口に膾炙していたわけである。田坂氏が〔為頼歌〕が詠まれたと推定する永祚元年（九八九）よりは実に約半世紀前である。また、為頼の姪紫式部も『源氏物語』の少なくとも二カ所で〔神無月歌〕を引歌としていることは縷述した通りである。従って、偶然一二句が一致したのでなく、〔神無月歌〕を知っていた為頼が、子を亡くした人に贈歌するにあたり、〔神無月歌〕を本歌にして詠歌した可能性の方が高かろう。ならば、為頼の詠歌は、十世紀末における本歌取りの例として注目すべきものになる（21）。

そうすると、『為頼集全釈』で「十月の時雨はいつだって悲しいのに子恋の森もいったいどんな気持ちで見ているのだろうか。」と訳されている〔為頼歌〕に込められている意味にはもっと深いものがあろう。〔神無月歌〕が本歌であることを考慮に入れて説明的に訳せば、「十月のしぐれはいつだって悲しいものだけど、故人を偲ぶあまりかつてないほどに袖を濡らしてしまった人もある。その人が亡くしたのは子供ではなかったが、亡くなった子を恋しく思っている子恋いの森、すなわちあなたも、いったいどんな気持ちで時雨を見ているのであろうか。」とでもなろうか。またさらにつけ加えれば、もし〔神無月歌〕が「高唐賦序」などを踏まえているものならば、最後に「時雨

が亡き子供の魂のように見えて悲しいのではないですか。」（22）という意味あいも付け加えてよかろう。

おわりに

以上、纏まりのないことを縷々述べるに終わってしまったのではないかと恐れる。〔神無月歌〕が引歌となっているなら、『源氏物語』等でどのような読みが可能か、探ってみたかったのである。大方の御叱正をお願いしたい。

注

（1）「『本院侍従集』考―配列に施された虚構を中心として―」（本誌第14号・一九九三年10月）

（2）前田家本『源氏釈』による。以下、この歌を〔神無月歌〕と呼ぶ。なお、「くたす」が書陵部本『源氏釈』では「ぬらす」に、定家自筆本『奥入』では「ひつる」になっているなど、本により小異がある。『源氏釈』・『奥入』は『源氏物語大成第七巻』により、濁点等は私に付した。以下、同じ。

（3）『源氏物語の人物と構想』（一九九三年・和泉書院）。もと、『文芸と思想』57号・一九九三年1月に同題で発表。なお、以後も田坂氏の見解をたびたび引用するが、断らない限りすべて同書による。

（4）『源氏物語』からの引用は、石田穣二・清水好子校注『新潮日本古典集成』により、引用末尾の〈〉内に巻数と頁数を記す。なお、『源氏物語』以外からの引用も含め、傍線はすべて私に付したものである。

（5）前田家本『源氏釈』による。定家自筆本『奥入』では下句が「かくそてひつるおりはあらじを」になっているなど、本により小異がある。

（6）『為頼集』60番。『為頼集』の引用・歌番号は、筑紫平安文学会著『為頼集全釈』（一九九四年・風間書房）による。なお、この為頼の歌には作者等について種々問題があるが、以下においては便宜上〔為頼歌〕と呼ぶことにする。注（21）参照。

（7）『本院侍従集』からの引用は書陵部蔵本（五〇一・一九七）を底本とする『私家集大成中古Ⅰ』により、私に濁点・読点等を付した。

（8）注（1）の拙稿において詳述した。なお、〔為頼歌〕の詠歌時期については注（21）も参照。

（9）総角巻については別稿「「かく袖ひつる」考―総角巻の匂宮の引歌表現―」（仮題）（『鈴峯女子短期大学人文社会科学研究集報』第41集・一九九五年1月刊行予定）を用意している。

（10）『全唐詩』（一九六〇年・中華書局）により、本文を挙げる。

庾令楼中初見時　武昌春柳似腰肢　相逢相笑（一作失）
尽如夢　為雨為雲今不知　鄂渚濛濛煙雨微　女郎魂逐
暮雲帰　只応長在漢陽渡　化作鴛鴦一隻飛

(11) 引用は、小尾郊一『全釈漢文大系　文選（文章編）二』（一九七四年・集英社）による。

(12) 『源氏物語大成第七巻』所収の前田家本『源氏釈』の校異には

「ひとりこつは」ノ次、書陵部本「文選文也」トシテ「巫山之女旦為＝行雲－暮爲＝行雨－ト云」ノ註文アリ。

とある。

(13) 『源氏物語評釈第二巻』（一九六五年・角川書店）

(14) 玉上琢彌氏の「源氏物語の引き歌（その一）―その種々相―」（『源氏物語研究　源氏物語評釈別巻一』一九六六年・角川書店。もと、『国語国文』第27巻第8号・一九五八年8月に同題で発表）にあることば。

(15) この点に関して田坂氏は「出典未詳歌が、たとえ存在したにしても、現実に伯父為頼の和歌がある以上、紫式部が葵巻の朝顔の姫君への文を叙するに当たって、為頼の和歌を意識しなかった可能性はないだろうから、引歌としては出典未詳歌と為頼歌と両説並記をしておくべきだろう。」（引用者注―「出典未詳歌」とは、〔神無月歌〕のこと）と述べる。

(16) 河添房江氏は、「引歌―源氏物語の位相―」（『論集和歌とレトリック』一九八六年・笠間書院）の中で、

物語世界を随半するような古歌を、つまりは歌語りや歌物語をかかえこむ和歌を引歌した方が、物語世界の線条性により強力に作用するという事情がありうるかもしれない。

と言う。河添氏の発言は、例えば帚木巻一巻の構想と古歌がどのように関わっているかというような問題を見据えてなされたものとおぼしいが、本稿でとりあげている葵巻・幻巻の引歌表現も歌物語的な〔神無月歌〕を引いて叙述されているとすれば、氏の考えに当てはまるものと思う。

また河添氏は続けて、

しばしば言われるように、歌物語や歌語りでは、歌本来の成立事情をそっくり明かす場合よりも、それが見喪われたのちに、新たな解釈として歌語りや歌物語がよびこまれるケースが殊のほか多い

と言う。〔神無月歌〕も本来の詠歌事情とは離れ、いつしか「高唐賦序」と「有所嗟」を踏まえた歌物語に仕立てられたのかもしれない。

(17) 山口博氏は「源氏物語の引歌」（『源氏物語講座第七巻』一九七一年・有精堂）において、『源氏物語』では登場人物が引歌を明示した場合は「折にかなって雰囲気にふさわし」い引歌がなされると指摘する。葵巻・幻巻での引歌は

氏の指摘通りである。それに比べるならば、『本院侍従集』の男の引歌表現は甘い。

(18) 田坂氏は注(15)で引用した部分に続けて、「ちょうど、岩波『古典大系』で、幻巻の「ふりしかどと、ひとりごちおはす」の部分に山岸徳平氏が出典未詳歌と共にこの為頼の和歌を挙げているように。」(引用者注―「出典未詳歌」とは、〔神無月歌〕のこと)と言っているので、幻巻の引歌として古注釈が〔神無月歌〕を指摘するのに気づいているはずだが、これ以上は何も述べない。

(19) 注(6)参照。引用したのは、田坂憲二氏の執筆部分。

(20) 注(1)に同じ。

(21) 〔為頼歌〕は『清少納言集』にも載っているなど問題は多いが、永祚元年(九八九)に為頼が詠んだという田坂氏の緻密な考証結果に従いたい。なお、たとえ、田坂氏の考証に誤りがあったとしても、為頼あるいは清少納言の頃に詠まれたのは確実で、『本院侍従集』よりはかなり後であることに違いはない。従って、〔神無月歌〕を本歌としているであろうという本論の主旨と抵触することはない。

(22) 〔為頼歌〕も死者が恋人でないことは『本院侍従集』と同じである。しかし、「ここゐのもりも」の助詞「も」がきいていると思う。すなわちこの「も」は、「恋人を喪ったわけではなく、子供を喪ったあなたも」という添加の意に採れるのである。なお、『為頼集全釈』によると、三手文庫本・宮内庁書陵部本・山口県立図書館本は「も」であるが、群書類従本・続群書類従本・慶応義塾大学本では「は」となっている由である。私の考えでは、「も」とありたいところである。

(つつみ・かずひろ　鈴峯女子短期大学講師)